

生涯にわたる発達課題論 について

—心理学の見方・教育人間学の見方—

北川 治 男

目 次	
序	3. 第四勢力としての超個人的心理学
I 普通道徳的品性から最高道徳的品性へ	III 教育人間学の見方
II 心理学の見方	1. 人間存在の基本構造
1. 認知理論	2. 非連続的な教育形式
2. 心理社会的理論	VI 品性完成への道

序

最近、ライフ・サイクルやライフ・スパンという言葉がよく用いられる。そして、人間が生まれてから死ぬまでの生涯にわたる発達のプロセスを全体的・統合的にとらえ、それぞれの発達段階 (life stage) における発達課題

(developmental tasks) を明らかにしようとする研究や文献が、非常に多くなってきている。

これらは、青年期までの身体的・心理的な発達を論じるだけでなく、成人期や老年期に到るまでの人間の人格形成のプロセスを、個人の置かれている社会的・文化的環境の影響や個々人の欲求や価値観などの諸要因を考慮に入れながら、解明しようとするものである。また、本格的な高齢化社会への突入を控えて、加齢 (aging) の研究も盛んである。

本稿は、そうした最近の研究や文献を渉猟して、それらに何らかの鳥瞰図を与えようとするものではない。それらの中から、筆者が特に関心を抱いた文献を一、二紹介し、モラロジー研究という視点から、今後研究したいテーマ、あるいは研究しなければならない課題を粗描することに、その主なねらいがある。

サブ・タイトルに「心理学の見方・教育人間学の見方」を挙げたが、その理由や意味内容は次の通りである。

『モラロジー概説』（昭和57年10月1日発刊）の第四章「人間の本性と道徳性の発達」に、モラロジーの文献としては恐らく初めて、道徳性の発達の問題が取り上げられたが、本稿はその第四章に直接関連するものである。『概説』が世に出て以来、今日まで、その内容について様々な質問や意見が寄せられている。第四章に関しては、そこで展開されている道徳的発達論は、心理学の立場からの発達論であって、モラロジーの立場から品性完成のプロセスを問題にする品性完成論が、まだ十分に論じられているとはいえない、という指摘が多い。

本稿は、そのような指摘を念頭に置き、今後『概説』において、モラロジーの品性完成論を展開していく場合の、方法論上の基本的な問題について、若干の問題提起をしようとするものである。その主な論点は、モラロジーの品性完成論は、科学的・実証的な心理学の発達論を踏まえると同時に、さらに哲学的・解釈学的な教育人間学の洞察を摂取する必要がある、そのような学際的アプローチを採らなくてはならないということである。

I 普通道徳的品性から最高道徳的品性へ

モラロジーの主要課題のひとつは、普通道徳的品性から最高道徳的品性への品性完成のプロセスを明らかにすることである。そこでまず、普通道徳的品性と最高道徳的品性の特徴づける鍵概念をいくつか挙げてみよう。

① 普通道徳的品性は、歴史的に発達してきた風俗・慣習・礼儀作法・公衆道徳をよく守ろうとする道徳性・品性であり、それに対して最高道徳的品性は、歴史を超越する聖人の道徳的感化によって洗練され培われた品性であるといえる。

② 前者は、私たちの自己保存の本能や欲求に支配された品性であり、自己中心性や党派性にとらわれたものである。後者は、万物を生成化育する慈悲心の主体としての品性であり、自他共存の普遍性のある生き方を志向するものである。

③ 前者は、「ギブ・アンド・テイク」の常識的な道徳のレベルに留まった品性であり、後者は、「道徳は犠牲なり相互的にあらず」という、いわば常識を越えるような無償の愛、献身的な世話を可能にする高次の道徳のレベルに達した品性である。

④ 普通道徳的品性の持ち主は、慣習や行為の形式的側面を拘り定規にあげつらう傾向があるのに対して、最高道徳的品性の持ち主は、それにとらわれず、相手に対する思いやりの精神作用を重視して、融通無碍に振舞う心術を心得ている。

⑤ 普通道徳的品性は、知的かあるいは感情的かに偏った品性であり、このような品性の持ち主は、私たちの多くがそうであるように、「知に働けば角が立つ。情に竿させば流される。とかくこの世は住みにくい」（漱石）ということになるのである。これに対して、知徳一体・情理円満という属性を備えた最高道徳的品性を身につけた人は、ハヴィガースト (Havighurst, R. J.) が「合理的利他愛⁽¹⁾」と呼んだ最高度の道徳的成熟を成し遂げた人であり、

毅然とした態度を内に含んだ謙虚で柔らかな広い心の持ち主であって、厳格さ（父性原理）と柔和さ（母性原理）の調和がとれた人であるといつてよからう。

上記のように特徴づけられた普通道徳的品性から最高道徳的品性への品性完成のプロセスは、漸進的な成長や発達のような連続的なプロセスとして理解すべきものであろうか。それとも、瞬間的な飛躍や価値観の質的転換を伴うような非連続的なプロセスとして説明すべきものであろうか。

あるいは、それは直線的・前進的プロセスなのか。さもなければ、進歩と退行を繰り返す行きつ戻りつプロセスなのであろうか。

さらに、それは、子供の時からの意図的、計画的な教育の累積がなければ到達できないものか。あるいはそうではなく、私たちの自覚と覚醒によっては人生のどの時期においても経験できる出来事なのであろうか。

これらの問題を解明して、品性の向上・完成のプロセスを、科学的・学問的に明らかにするのが、モラロジーの課題である。これらの問題は、心理学ではどのように扱われているのであろうか。まず、そのことから述べてみよう。

Ⅱ 心理学の見方

発達心理学の中に、道徳性の発達に関する研究領域がある。本稿と最も深い関係にあるのは、恐らくこの分野であろう。道徳性に関する研究は、アメリカでは、1928年のハートショーン (Hartshorne, H.) などの研究の後、しばらく報告されていなかったが、再び1950年代の後半から1960年代にかけて多くの研究が発表されるようになり、この傾向は現在まで続いている。

道徳性に関する心理学的研究は、主として4つの方向からなされている⁽²⁾。第一の方向は、精神分析学からのアプローチである。第二の方向は、学習理論を背景にした研究である。第三の方向は、社会心理学からのアプローチである。第四の方向は、道徳性の認知的側面の発達を中心に考える方向である。

① 精神分析学的研究では、超自我が道徳性または良心とよばれる。この超自我は、善悪を判断する機能を持ち、イドと自我とのバランスを保つ役割を果たしている。超自我は後天的に同一化の過程を経て形成される。精神分析学からの道徳性の研究は、このような同一化過程と超自我形成過程との関係を追求する。

② 学習理論からのアプローチとして、最近、バンデュラ (Bandura, A.) の社会的学習理論が注目されている。これは、外在化されたモデルの影響によって道徳的行動は形成されるという前提に立って、誘惑への抵抗力や愛他的行動の形成過程を研究しようとするものである。

③ 社会心理学的アプローチの基本的な背景は、グループ・ダイナミックスの理論である。これは、社会的相互作用による道徳的行動の変化を問題にする立場である。主として愛他的行動と援助行動の研究が関心事となっている。

④ 認知的発達を中心とした研究は、道徳的行動よりも、道徳的判断、つまり認知過程に主たる関心をもつ。上記①②③の立場は、いずれも道徳的行動の他律的側面を重視しているのに対して、認知理論は、道徳的行動は基本的に他律的なものではなく自律的な判断によって生起するものと考えているのである。このように、道徳性の自律的側面を強調し、道徳的判断という認知的側面を重視する立場は、高次の道徳性を研究するとき、欠かせない立場である。この立場の代表的なものは、コールバーグ (Kohlberg, L.) の道徳的発達の六段階説である。

1. 認知理論

ピアジェ (Piaget, J.) によって始められた道徳的判断の研究は、その後、コールバーグによってさらに発展させられて今日に至っている。現在、道徳的判断の研究といえば、コールバーグの研究を中心として行なわれていると言っても過言ではない。次にコールバーグの道徳的発達の六段階説について述べれば、次の通りである⁽³⁾。

I 慣習以前のレベル

段階1 罰と服従への志向

段階2 素朴な利己主義への志向

II 慣習的レベル

段階3 良い子への志向

段階4 法と秩序への志向

III 脱慣習的レベル

段階5 社会契約的な遵法主義への志向

段階6 普遍的な倫理的原理への志向

慣習以前のレベルにいる人は、外部の力や権威に従って規則を守るのであって、行為の動機は罰を避け権威に服従することにあり、自分の利害や打算によって動かされる。

慣習的レベルの人は、自分の属している集団や社会の人々の意見や期待に従って生きようとし、人々から是認されることを望んでいる。そのため社会のルールをよく守り、自分の社会的役割を忠実に果たそうとする。つまりモラロジーの観点からいえば、風俗・慣習・礼儀作法や公衆道徳を尊重しそれに従おうとする普通道徳のレベルが、これに相当するといってもよからう。

次に、脱慣習的レベルに達した人は、正義や人権の平等および人間の尊厳性に対する尊重というような普遍的な倫理的原理に基づいて行為しようとする。このレベルの脱慣習的道德 (postconventional morality) の意味は、慣習的道德 (conventional morality) の後に来る道德、慣習からは独立した慣習にとらわれない道德ということである。あるいはコールバーグ自身が、「原理原則をもった道德」(principled morality) という別の表現も用いているが、この方が分かりやすいかもしれない。つまり、脱慣習的レベルというのは、慣習を越えた、あるいは自分自身の内面に原理原則をもった自律的な道德のレベルである。

1983年7月、ハーバード大学教育学部大学院博士号取得候補生のオーガス (Oguss, C.) 氏が、視察のためモラロジー研究所を訪れた。氏はモラロジー研究所の岩佐信道研究員 (留学中) と同様、コールバーグの下で道德性の発達について研究を続けている若手の学究である。オーガスは、コールバーグの脱慣習的道德とモラロジーの最高道德の類似性を指摘し、今後人類の道德の発達を促進するために、洋の東西を越えて対話し、共同研究を進めていく必要があると主張した。

コールバーグは、特定の宗教的・形而上学的な前提を排除した実証的研究を目指しており、人生の究極的な目標については沈黙しているように思われる。脱慣習的道德は、何か特定の宗教や思想から導き出されたものではなく、できるだけ多くの他者や人類全体の福祉の増進というような経験的な標準が問題にされているようである。

それに対してモラロジーは、聖人の思想や事跡に一貫する道德原理を最高道德として抽出し、そこに人生の標準を求めている。オーガスも、人生の質を高めるために必要なコスモロジーを問題にし、コールバーグの六段階を越える、第七段階としての宇宙的意識の段階を設定する必要があるのではないかという問題提起を^(補注)した。脱慣習的道德と最高道德の類似点と相違点については、さらに検討すべき課題であろう。

2. 心理社会的理論

次に紹介するのは、心理社会的理論の立場である。この理論は道德性の発達の問題を直接取り扱ったものではないが、ここでこの理論を取り上げる理由は、この立場が、ライフ・スパン、つまり人間が生まれてから死ぬまでの生涯の時間をカバーした発達論であるからである。この理論は、エリクソン (Erikson, E. H.) の基本的諸徳の八段階説に基づくものである。この心理社会的理論は、個人の欲求と文化の社会的要請との結合場面を問題にし、人間の発達・人格的統合のプロセスを明らかにしようとするものである。人は、それぞれの発達段階に特有な問題に直面するが、その都度、自分自身の

欲求や技能と文化的社会的要請とを統合させつつ心理社会的発達を遂げていくのである。

ここに紹介するニューマン著『生涯にわたる発達——心理社会的アプローチ——』(Newman, B. M. & Newman, P. R. *Development Through Life — A Psychosocial Approach*—, The Dorsey Press, Revised Edition, 1979)は、エリクソンの八段階説を基にし、さらに2つの発達段階を付け加えて、十段階説を展開している。すなわち、エリクソンの八段階のうちの青年期を、青年前期と青年後期の2つに区別し、さらに乳児期の前に、妊娠から誕生までの胎生期を設定したことが特色である(ただし1975年版では、胎生期はなく九段階説になっている⁽⁴⁾。この発展は興味深い)。その内容の骨子は、以下の通りである。

発達段階	発達課題	心理社会的危機
胎生期 (妊娠—誕生)		
乳児期 (誕生—2歳)	1. 社会的愛着 2. 感覚運動的知能と原始的因果関係 3. 対象が永続することの理解 4. 運動機能の成熟	信頼 対 不信
歩行期 (2歳—4歳)	1. 自己制御 2. 言語の発達 3. 空想と遊戯 4. 移動能力の完成	自律感 対 恥・疑惑
児童前期 (5歳—7歳)	1. 性役割との同一化 2. 初期の道徳的発達 3. 具体的操作 4. 集団遊戯	積極性 対 罪悪感
児童中期	1. 社会的協同	勤勉感 対 劣等感

(8歳—12歳)	2. 自己評価 3. 技能の習得 4. チーム・プレイ	
青年前期 (13歳—17歳)	1. 身体的成熟 2. 形式的操作 3. 仲間集団の一員になること 4. 異性との関係	集団的アイデンティティ 対 疎外
青年後期 (18歳—22歳)	1. 両親からの自律 2. 性役割の獲得 3. 内面化された道徳 4. 進路の選択	個人的アイデンティティ 対 役割の混乱
成人前期 (23歳—30歳)	1. 結婚 2. 出産 3. 仕事 4. ライフ・スタイル	親密性 対 孤立
成人中期 (31歳—50歳)	1. 家庭の経営 2. 子供の養育 3. 人生行路の管理	生殖性 対 停滞
成人後期 (51歳—)	1. 新しい役割へのエネルギーの転換 2. 自己の人生の受容 3. 死に対する見方の発展	統合 対 絶望

心理社会的理論は、①発達段階、②発達課題、③心理社会的危機、④コピーング過程の4つの構成概念に基づいている。

①上記の発達段階の年齢範囲は、個人差があるので、絶対的なものというより、おおよそのものに過ぎない。しかしこの理論においては、各段階で生ずる心理社会的発達が、それに続く全段階に対して大きな影響を与えるということを仮定する。

②発達課題とは、ハヴィガースト (Havighurst, R. J.) によって初めて用

いられた概念であるが、それは一連の技能と能力から成り、「ある年齢段階の子どもにとって達成されるべき包括的な発達基準の一つ⁽⁶⁾」である。すなわち、発達課題というのは、「発達過程のそれぞれの段階で、人間が幸福な人生を送るために必要とされる課題があり、その課題をうまく達成することは、その個人の幸福とその後の諸課題の成功をもたらすが、その課題をうまく達成できないと、その個人の不幸、社会からの否認を招き、その後の諸課題の達成を困難にするような一連の課題⁽⁶⁾」のことである。たとえば、乳児期の発達課題の一つに社会的愛着がある。この課題は、発達の初期になされなければならないものである。その後の人生において、暖かい友情関係や親密な結婚関係を築くことができるかどうか、ある程度、母親的人物に対する初期の愛着関係を築きあげていたかどうかにかかっている。

③心理社会的危機というのは、人がそれぞれの発達段階において、社会的環境からの要請に適応しようとする心理学的努力のことである。この場合の「危機」という言葉は、何らかの異常な出来事というよりは、正常なストレスと緊張を意味している。心理社会的理論は、社会はそこに住む個人に対して、それぞれの発達段階に応じて異なった精神的な要求を出すと仮定している。個人は、これらの要求を行動の指針や期待として受けとめ、各発達段階の終りに近づくと、これらの社会的要求に適応していくのである。この過程は、ある種の緊張状態をもたらすが、人は次の段階へ進むためには、この緊張状態を乗り越えなければならない。このような緊張状態を、心理社会的危機とよぶのである。そして、以前の危機を解決できたか否かが、現在および将来の危機の解決に影響を及ぼす。

乳児期から成人後期までの各発達段階における心理社会的危機は、それぞれ「信頼 対 不信」「自律感 対 恥・疑惑」……「統合 対 絶望」というように、対概念で示されており、それぞれの危機が解決された場合と失敗した場合の本質を表わしている。ここで注意すべきことは、危機の解決が全く失敗に終る可能性は小さく、また、誰でもある程度まで、失敗の経験を各段階で味うものだということである。

④コーピング過程とは、各発達段階において、ストレスを解消し直面する諸問題に対して新たな解決策を考え出そうとする積極的な努力のことをいう。エリクソンによれば、このような努力を通して、人間的な強さとしての徳が発達するという。彼は、「個人の自己完成のための徳」と「次代の育成のための徳」について述べ、両者を不可分の関係でとらえ、それらを一つのシステムとして展開している。前者には、幼少期に実現されるべき「希望」「意志」「意図」「能力」の4つの徳と、青年期の「忠誠」があげられ、後者には、成人期に実現されるべき「愛」「慈育(ケア)」「知恵」の3つの徳が指摘されている。

人間のライフ・サイクルは、①それ自身で完結しようとする傾向(自己完結性)をもつと同時に、②前の世代から次の世代へと限りなく連なっていく鎖の一環をなそうとする傾向(世代連鎖性)をもつ⁽⁶⁾。このように、個人の生(個人的生のサイクル)を、同時に世代の連鎖(世代のサイクル)の一環としてとらえるところに、エリクソンのライフ・サイクル論の特質がある。したがって、彼によれば、私たちが本当に自己の生を全うするには、個人としての完成に必要な条件(個人的徳性)を実現するように努力するのは当然であるが、それだけではなく、次の世代が自己の生を全うするために必要な徳性を育成する責任を果さなければならない。成人期に実現されるべき「愛」「慈育」「知恵」の徳は、直接、間接に次代の育成にかかわる徳であり、同時に、これらの徳を実現することが、自己の生を全うするための不可欠の要件となるのである。

さて、上述した心理社会的理論は、モラロジーにおける品性完成の心理学的プロセスを明らかにする上で、非常に示唆に富むものと思われる。品性完成は、社会規範に順応して忍耐克己し勤勉力行する自己保存的努力(普通道徳)によるだけでは達せられるものではなく、慈愛の心をもって人の世話をし人を育てる利他的努力(最高道徳)を継続するうちに徐々に達成されるものである。最高道徳的品性は、成人期に実現されるべき「次代の育成のための徳」と深いかかわりをもっている。この意味で、最高道徳的品性の涵養は

主として人生後半の課題といえよう。しかし、それは人生前半に実現されるべき「個人の自己完成のための徳」の基礎の上に築かれるものである。したがって、人生の初期から、各段階における発達課題をひとつひとつ達成していくのでなければ、後半における品性完成を期待することは難しい。しかし、人生の前半と後半における道徳的努力には、明らかに方向の転換が図られなければならない。人生後半においては、自己の完成のための個人的徳性の涵養に努めるとともに、次代を育成する（より一般的には人の世話をし人を育てる）ための利他的徳性を涵養することが肝要である。このような利他的徳性の涵養と相俟って、はじめて個人的徳性も完成されたものになるのである。これが品性完成のプロセスである。

3. 第四勢力としての超個人的心理学

次に紹介したいのは、アメリカ成人教育継続教育協会 (American Association for Adult and Continuing Education) の月刊誌『生涯学習—成人期』 (Lifelong Learning—The Adult Years) 1983年3月号に載せられたブクーヴァラス (Boucouvalas, M.) の論文「社会変容、生涯学習および第四勢力—超個人的心理学」 (Social Transformation, Lifelong Learning, and the Fourth Force—Transpersonal Psychology) である。この論文は、最高道徳的品性を普通道徳的品性から区別する上で重要な要件となる「自我没却」の心理学的基礎づけについて、興味深い問題提起をしている。つまりこの論文は、自己実現を目標として論じられてきた生涯学習論を、自己超越という新しい目標に照らして再構成する必要性について述べたものである。

この論文によれば、マスロー (Maslow, A. H.) 自身が、第三勢力としての人間性心理学を越えた、第四勢力としての超個人的心理学の出現について言及している。つまりマスローは、「第三勢力としての人間性心理学は、さらに高次の第四勢力の心理学を準備するための過渡的なものである」と考える。第四勢力の心理学は超個人的・超人間的なものであって、人間の欲求や興味よりも宇宙に中心を求め、人間らしさ、自己同一性、自己実現のようなもの

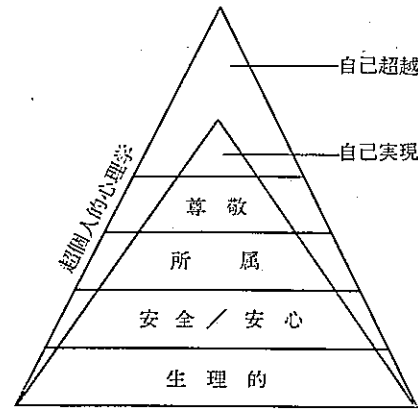
を越えていくものである」と述べている。⁽⁹⁾

また人間性心理学は自己実現した人間について多くを語っているが、マスローは二種類の自己実現を区別し、「超越的自己実現者」と「非超越的自己実現者」を区別している。そしてこの「超越的自己実現者」は、利己性と非利己性の二分法を超越しており、また個人的な自己満足よりも人間性への奉仕ということが、その人を駆り立てる動機づけの源泉になっていることが多いと述べている。

第四勢力としての超個人的心理学の中心概念は「超個人的自己」 (transpersonal self) である。この「超個人的自己」は、「自我 (ego) の矛盾を観察し超越すると同時に、日々の感情と思考の動揺からは独立した純粹自覚 (pure awareness) の中心」 (ブクーヴァラス) である。これに対置される概念は、「自我的自己」 (ego self) であり、この「自我的自己は事物を分離したものと見、超個人的自己は万物を統一と相互連関においてとらえる」 (ブクーヴァラス) のである。

さて自我の確立・自我の発達ということが心理学の重要な課題であるが、第四勢力としての超個人的心理学の立場からは、この自我の確立・自我の発達は子供時代の重要な課題であるという位置づけがされており、その上にさらに自我の超越がなされなければならない、と考えられている。そして、この自我の超越は、成人期および老年期にいたって初めて可能なものであると考えるのである。しかし同時に、健全な自我の超越は、人生の前半における自我の確立や自我の発達、自我の統合を前提にして初めて可能になるといわれている。

したがって、この第四勢力の立場からすれば、生涯学習の新しい目標は、「超個人的自己」の完成を目指しながら、自己確信の念や健全な自己概念を発達させることとしてとらえられる。次の図は、マスローの欲求の階層を超個人的心理学によって拡大し、人間的成長の極点に自己超越を置いた図である。自己実現を頂点とする内側の三角形は、人間性心理学の立場であるが、それを越える超個人的心理学の立場が、自己超越を頂点とする外側の三角形



で表わされている。

モラロジーにおいて、品性完成のための不可欠の要件とされる「自我没却」は、上述したこととの関連で言えば、「自我的自己」から「超個人的自己」へと自己を超越することであると言ってよいであろう。そして最高道徳的品性は、この自己超越を通して獲得されるものといえる。こうして「自我的

自己」は克服されなければならないけれども、それが可能となるためには、人生前半において自己確信の念や健全な自己概念が充分発達していなければならない。ここに品性完成のプロセスのダイナミズムがある。人生後半における自己超越は、人生前半の自我の確立・自我の発達の基礎の上になされるものであるが、人生前半と後半の生き方には、明らかに視野の拡大が図られなければならない。モラロジーでいう品性完成も、このような人生前半の課題と人生後半の課題をダイナミックに調和し統合していく過程を通して成し遂げられていくものといえよう。

普通道徳的品性から最高道徳的品性への品性完成のプロセスを明らかにするのに、上述した3つの心理学的見解は非常に示唆に富むものである。それらはいずれも人格形成を幼少時からの連続的・前進のプロセスとしてとらえているように思われる。コールバーグは道徳的思考の発達過程を明らかにし、心理社会的理論は、個人の欲求や技能と文化の社会的要請との統合過程を問題にし、人生の各段階における発達課題を明らかにした。コールバーグは、道徳性のある発達段階から他の段階への移行が起こる場合、それは1段階下への下降でもなく、2段階上への一足飛びの上昇でもなく、1段階上への順を追った移行であることを明らかにしたのである。心理社会的理論は、

人生の各段階で生ずる心理社会的発達がそれに続く全段階に対して大きな影響を与えるということを仮定し、ある段階での心理社会的危機を解決できたか否かが、それ以後の危機の解決に影響を及ぼすことを示した。

それに対して、超個人的心理学は、自己超越について語る時、ある種の非連続的な飛躍を問題にしているようにも思われる。しかしこの自己超越は、人生前半における自我の確立・自我の発達の基礎の上に行なわれる人生の視野の拡大ともいうべきものであって、あくまでも内発的な自己展開のプロセスを指したものであろう。生涯学習の新しい目標として掲げられた自己超越も、自己実現の延長線上に設定されたものであって、自己実現を全く否定する別の超越的次元から導き出された目標と考える必要はないであろう。エリクソンの「次代の育成のための徳」（「愛」「慈育」「知恵」）も、あくまでも「個人の自己完成のための徳」を基盤として、自己展開のプロセスを通して習得されてゆくものであって、何らかの宗教的・形而上学的前提から導き出されたものではないであろう。このことは、科学的・実証的な心理学の立場からは、むしろ当然のことと言わなくてはならない。ただし、第四勢力としての超個人的心理学（今だひとつの運動として存在するに過ぎない）は、個人の宗教的・実存的自覚の問題に、心理学の立場から直接迫ろうとしたもので、今後の動向が注目されよう。いずれにしても、心理学の立場から品性完成のプロセスを解明するためには、それを連続的・前進的なプロセスとしてとらえ、できるだけ全体的・統合的な視野の下に道徳的発達論や人格形成論の成果を摂取して、生涯にわたる発達課題論を構築していくことが望まれる。

Ⅲ 教育人間学の見方

以上の科学的・実証的な心理学の立場からの道徳的発達論や人格形成論を踏まえて、さらに哲学的・解釈的な教育人間学の立場からの人間形成論について述べてみたい。

1. 人間存在の基本構造

本稿では、下程勇吉先生（京都大学名誉教授・モラロジー研究所研究部顧問）による人間存在の基本構造に関する見解を参照してみたい。下程先生は、教育人間学の立場から、人間の全体的基本構造を下記のようにとらえている。

天	超越性の原理 (超意味への意志)	時熟的瞬間	心のよこび
人	実存性の原理 (意味への意志)	対決的瞬間	心のはり
地	現実性の原理 (快樂への衝動)	生滅的瞬間	心のしこり

人間は他の動物と較べて直立歩行をするところに特色があるが、この直立歩行の体制が、根源的に人間の全体的基本構造を条件付けるのである。直立歩行する人間の足は大地（自然・物質）を離れないが、同時に人間の目は天（超越・永遠）をおおぐことができる。このように、人間は「天と地との上下両方向にひかれる二重構造」をもつ存在である。

まず、地に即する面から言えば、人間は日々快樂への衝動に駆られ、現実性の原理に支配されて、現実生活において「たえずしこりをつくり、憂苦の系列に浮沈し、たえず生滅的瞬間を送迎する不安の存在」である。

次に、人間は、このような快樂への衝動を克服し、より高い人生の意味を求めて生きる自覚的生き方をする存在でもある。これはいわば、心に「はりをもって瞬間ごとによく実存的に対決して生きる」生き方であり、実存性の原理に従った生き方であるということができる。

下程先生によれば、このような自覚的・実存的な生き方は尊重されるべきものではあるが、同時にともすると「自己をたのむ自家中毒性」を免れない。モラロジーの創建者、広池千九郎博士が、日誌の中で「心を研くほど、すぐ

人の悪が見ゆる」と述べているが、それはまさに、この実存性の原理に従った生き方の問題点を的確に示したものとさえいえる。さらに広池博士は「熱心の弊」ということを述べ、熱心というのは非常に重要な道徳ではあるが、それはまた同時に人間を自他ともに苦しめることがあるという弊害を免れないことを指摘している。この実存性の原理は、モラロジーに引きつけていえば、普通道徳の原理に符合するものといつてよからう。

このような実存性の原理の限界を超越し、真実の人間の自覚を可能にするのが、超越性の原理が支配する世界である。それは超越的光明（超意味）を仰ぐ絶対的信仰のレベルであり、そこでは「自家中毒性を絶望的に自覚し、自己を放下し、天地とともに生きる大らかなよこび」が時熟して享けられるのである。これをモラロジーに引きつけていえば、「深く天道を信じて安心し立命す」「現象の理を悟りて無我となる」あるいは「自ら運命の責めを負うて感謝す」という最高道徳的な心の地平に相当するものと思われる。

以上のような人間の基本構造は、人間が自覚の深まりとともに道徳的成熟を成し遂げ人格的統合を達成していく人間形成の階梯を論じたものといえることができる。ここでは、いわゆる心理学的な連続的・前進的な道徳的発達や人格形成のプロセスが問題にされているのではなく、人間の生き方・価値観の根本的・質的転換や自覚・悟りの深まりが主要な関心事になっているのである。

上述したような哲学的・解釈学的な教育人間学の洞察に従えば、普通道徳的品性と最高道徳的品性は、人間の自覚の全く異なった次元に位置しているものであって、前者から後者への移行は、実存性の原理に従った生き方から超越性の原理に基づく生き方へと、自己の人生に対する態度や姿勢を根本的に転換し、人生観・世界観・価値観を質的に再構成することを経て、初めて可能になるものといわなくてはならない。このように見てくると、品性完成への道は連続的・前進のプロセスというよりは、非連続的な飛躍を本質的な契機として含んでいるといえるのではなからうか。

2. 非連続的な教育形式

このことと関連して、ボルノー (Bollnow, O. F.) は連続的な教育形式と非連続的な教育形式の区別と両者の相互補完関係⁽¹¹⁾について論じている。まず連続的な教育形式とは、理想主義的な基礎の上に打ち立てられた陶冶 (Bildung) の概念のことをさし、非連続的な教育形式を代表するものは、実存哲学的前提から生ずる出会い (Begegnung) の概念である。

従来、教育とはこの陶冶を意味し、教育を成長や彫刻になぞらえる見方が一般的であった。つまり、植物の種子を蒔き、水と熱を与えて発芽させ、さらに養分を施して成長を促し、葉をつけさせ花を開かせやがて実を結ばせるように、教育は、人の可能性を引き出し育て最大限に発揮させようとする営みである。あるいはまた、彫刻家がゴツゴツとノミを振るって、自分のイメージに従って大理石をある像に刻んでいくように、教育者は子供という素材を自分の理想に従って造り変えていくのである。子供の成長の速度に先立って上から強く引っぱりあげても、性急なノミの一打を加えても、教育は成功しない。陶冶は機を見て意図的・計画的に施される連続的な企てである。従来の教育学は、主としてこの連続的な教育形式の解明に取り組んできたのであるが、実はそれ以外に、非連続的教育形式があることを見過ごしてきたというのが、ボルノーの主張である。

人生には様々な危機や挫折がつきものであるが、教育学はこれらの問題に無関心ではいられない。あるいは思いがけない人との決定的な出会いや特定の個人から受けた訓戒および人格的感化、それらに付随する突然の覚醒なども、教育学上重要な出来事である。出会いや覚醒に代表されるこれらの出来事は、人間形成上重要な意味をもつものであるが、それらは人間の意図や計画を越えたところで偶発的・運命的に人を襲うのである。この意味で、これらの出来事は、非連続的な教育形式と呼ぶのにふさわしい。

人は前もって出会いを設定しておくことはできない。その意味で、出会いを教育学的に方法化することはできない。しかし同時に、何も無いところに

出会いは起こり得ない。それは、何らかの意味で出会いを受け入れる準備が整った特定の個人にのみ起こり得るものである。そのためには、それまでの長い陶冶の布石がなくてはならない。ここに連続的な教育形式 (陶冶) と非連続的な教育形式 (出会い) の相互補完関係がある。ボルノーの教育人間学は、両者の区別と相互関係について優れた洞察を提示している。

IV 品性完成への道

普通道徳的品性から最高道徳的品性への品性完成のプロセスを解明する際、ボルノーの見解は非常に示唆に富むものである。このプロセスは、連続的な教育形式を通して徐々に促進される側面と、非連続的な教育形式を媒介にして一挙に新たな展開を見せる側面とがある。

すでに述べたように、心理学は主として連続的な側面について豊富な見解を示している。道徳性の発達、ひとつひとつ段階を追って促進されるものであり、人格形成は、幼少期からのそれぞれの段階における発達課題を順序よく成し遂げていくことによって行なわれるものである。しかし人生行路は必ずしも順風に帆かけたような連続的・前進のプロセスではない。人生に失敗や挫折はつきものであり、進歩と退行の繰り返しが現実の生活のあり方である。品性完成も、このような非連続的な行きつ戻りつプロセスを経て達成されるのである。

この非連続の側面については、教育人間学の洞察が極めて有効である。なぜなら、そこでは人生観・世界観・価値観の根本的・質的転換や実存的自覚・覚醒などを問題にするからである。

モラロジーは、品性完成のプロセスを科学的・学問的に解明することを課題とするが、心理学の道徳的発達論や人格形成論を「普通道徳的品性から最高道徳的品性へ」という概念的枠組で解釈しつつ、心理学の科学的・実証的成果を取り入れると同時に、教育人間学の哲学的・解釈学的手法を用いてこの概念的枠組をより精緻なものにし、心理学的研究に新たな理論的枠組を

提示していく必要がある。このような科学的・実証的研究と哲学的・解釈的研究とを相互補完的に関連させることによって、生涯にわたる発達課題論を進展させていく過程で、モラロジー独自の品性完成論が構築されてゆくであろう。

Theories Concerning Developmental Tasks Through Life —Psychological and Educational Anthropological Approach—

Haruo Kitagawa

参考文献

- (1) Peck, R. F. & Havighurst, R. J. *The Psychology of Character Development* (John Wiley & Sons, Inc., New York・London, 1960)
 - (2) 詫摩武俊・飯島婦佐子共編『発達心理学の展開』(新曜社、昭和57年)
 - (3) Munsey, B., ed. *Moral Development, Moral Education, and Kohlberg* (Religious Education Press, Birmingham Alabama, 1980)
 - (4) B. M. ニューマン/P. R. ニューマン著 福富護/伊藤恭子訳『生涯発達心理学——エリクソンによる人間の一生とその可能性——』(川島書店、1980年)
 - (5)(6) 『教育学大事典』(第一法規、昭和53年)
 - (7)(8) 『森昭著作集6 人間形成原論 遺稿』(黎明書房、昭和52年)
 - (9) Maslow, A. H. *Toward a Psychology of Being* (Van Nostrand, Princeton, New Jersey, Rev. Ed. 1968)
 - (10) 下程勇吉著『宗教的自覚と人間形成』(広池学園事業部、昭和45年)
 - (11) O. F. ボルノー著 峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』(理想社、昭和47年)
- (補注) コールバーグの道徳的発達の六段階説が一般的であるが、実は彼自身も七段階としての「信仰」の段階を問題にしている。*The Journal of Moral Education* (NFER—Nelson) 1984年1月号に、コールバーグの道徳的発達論とマズローの欲求の階層説を比較対照した論文が掲載された。そして、コールバーグの「信仰」の段階とマズローの至高経験 (peak experience) の類似性を指摘しているのは興味深い。

Morality aims at clarifying the process of character formation by which the individual moves from the level of ordinary morality to that of supreme morality. Recent theories concerning developmental tasks through life seem to be significant to this aim.

In this article, it is proposed that the scientific and positivistic approach of psychology as well as the philosophical and hermeneutic approach of educational anthropology should be taken into consideration and correlated with each other in the light of morality.

L. Kohlberg's cognitive theory of moral development concerning six (or seven) stages and three levels is an important example of the psychological approach. His second level of conventional morality can roughly be identified with the level of ordinary morality. His third level of post-conventional morality and the level of supreme morality have some similarities, but detailed comparison needs to be researched further.

B.A. Newman and P.R. Newman's psychosocial approach to development through life, which is based on E.H. Erikson's theory, shows us how we achieve human virtues through solving psychosocial crises as well as mastering the developmental tasks of each life stage.

Transpersonal psychology, as the "fourth force" in psychology, proposes the necessary extension of the goal of lifelong learning from self-actualization to self-transcendence, showing that healthy self-transcendence in the adult and gerontological years presupposes development of ego integrity and ego strength in childhood.

These psychological approaches deal mainly with the continuous and progressive process of moral or personality development. On the other hand, educational anthropology is more concerned with the discontinuous aspects of human growth such as sudden leaps or regressions in the course of our life.

Y. Shitahodo and O.F. Bollnow give philosophical considerations to human affairs such as fundamental changes in life-orientation or qualitative reconstruction of an individual's value system through existential awakening, admonishment, encounter, faith and so forth. Bollnow distinguishes these affairs as a discontinuous form of education over against continuous ones such as progressive growth and development.

In order to clarify the process of character formation from the moralological point of view, both of these forms of education should be taken into consideration and psychological and educational anthropological approaches to life development should be correlated with each other.